

校長室だより No.17 12月23日(月)

「いや、千尋はよく頑張った」(2学期終業式講話)

今年の夏も暑い夏でした。そしてその夏が10月の下旬まで続いた印象を持っています。そして大雨や災害もやはり多い一年でした。こんな異常な気候が当たり前になりそうで、スウェーデンの16歳、グレタ・トゥーンベリさんでなくとも本当に危機感を覚えます。

さて、あっという間に2学期が終了しました。学園祭に始まり3年生は就職試験、進学試験がありました。私も多くの生徒の面接指導をしましたが、しっかりと自分の将来を考えている人が多かったことが印象に残っています。ロードレース、そして情報ITフェアと大きな学校行事が多く、生徒たちの取り組みの素晴らしさや情報科学高校の素晴らしさを改めて実感する機会となりました。

2学期の終業式では生徒の皆さんに『千と千尋の神隠し』(2001年公開・宮崎駿監督)の話をしました。2001年は平成13年、ちょうど3年生が生まれた年に当たりますので知っているかどうか不安でしたが、多くの生徒が「知っている」と首を縦に振ってくれたことに安心して話をしました。

いくつかの場面での少年ハクの言葉を取り上げましたが、その一つががタイトルの「いや、千尋はよく頑張った」という言葉です。これはハクが千尋をかかまうために油屋への橋を一緒に渡る場面です。千尋が人間とばれないようハクは千尋に橋を渡る間は息をしてはいけないと伝えます。必死に息をこらえる千尋。しかし、あと少しというところで飛び出してきたカエルに驚き、千尋は息をしてしまいます。カエルに人間の気配を感じかれ、ハクはカエルに術をかけてなんとか油屋の敷地にたどり着きます。

「ごめん、私、息しちゃった」と謝る千尋に対してハクが言ったのが「気にしないでいいよ」などの自分中心の言葉ではなく「いや、千尋はよく頑張った」でした。一生懸命頑張ったのに…という千尋の心に寄り添った、素晴らしい言葉だなと思います。

千尋は映画のなかで様々な困難に立ち向かいながら成長していき、最後には湯婆婆から豚にされた両親を取り戻します。千尋がそうやって前に進めたのはハクや釜ジイやリンなど本当に自分のことを認め、励ましてくれる信頼するに足る存在があったからなのだと感じています。

この2学期、校長として嬉しいこともたくさんありましたが、一番心を痛めていたのは人の陰口や心ない言葉によって多くの生徒が悩んでいるということでした。人の悪口からはプラスの感情は一つも生まれて来ません。言われている側にとっても、言っている人にとっても同じです。人をおとしめる言葉ではなく、ハクのように本当に相手のことを考えた言葉がけや行動に心を砕いて欲しいと思います。

自分を心から心配してくれる、励ましてくれる人がいると思うことで人は頑張り、前に進んでいけるのだと思います。人間関係で悩むことは当然あります。

しかし、それを支えてくれる人がいるからそれを乗り越えていけるのだと思います。生徒には「いや、千尋はよく頑張った」というハクの言葉に込められた思いを感じ取れる人になって欲しいし、それが言える人になって欲しいと思っています。

私からは「今学期、皆さんは本当によく頑張った」と伝えました。今後も情報科学高校が生徒の皆さん一人一人にとって、安心して「自己実現に向けて頑張れる場所」であり続けるよう努めていきます。

さて、来学期、特に1，2年生は商業科科目の総決算である検定の季節が始まります。また3年生は最後の冬休みになります。それぞれ有意義な年末年始であることを願っています。

※今回の『千と千尋の神隠し』の内容は島根大学こころと育ちの相談センター岩宮恵子教授の『好きなものにはワケがあるー宮崎アニメと思春期のこころー』（ちくまプリマー新書）を参考にさせていただきました。思春期の子供たちのこころを理解する上で教員にとっても保護者にとっても大変参考になる本です。